

手術データベースを用いた急性大動脈解離治療の現状に関する研究

研究分担者 本村 昇 （東邦大学医療センター佐倉病院）
研究分担者 高橋 新 （慶応義塾大学）
研究分担者 宮田裕章 （慶応義塾大学）

研究要旨：心臓大血管救急における外科治療の現状を把握するために日本心臓血管外科手術データベース(JCVSD)を用いて急性大動脈解離手術に関して2013年から6年間の症例数を二次医療圏の人口分布に応じて解析した。過疎型では大都市型に比し手術施設までの到達時間が延長していた。

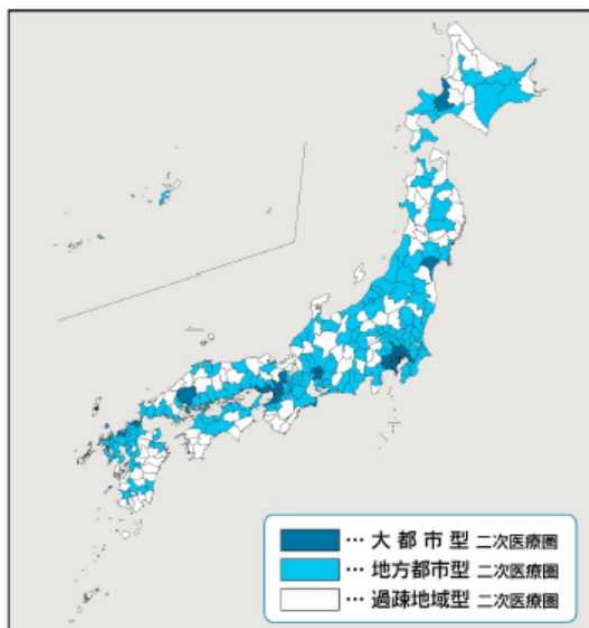
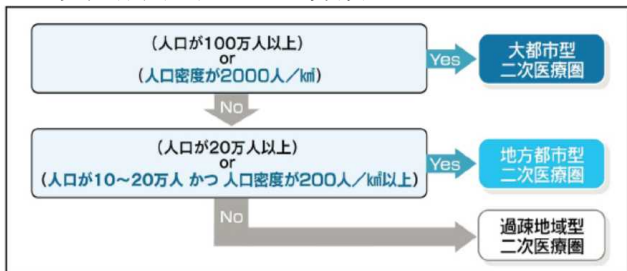
A. 研究目的

心臓大血管救急における ICT を用いた医療情報連携の普及と広域救命救急医療体制確立の研究をすすめる上でその前提となる現状を把握するために急性大動脈解離手術の地域人口分布を含めた全国動向を知ることが目的とする。

B. 研究方法

日本心臓血管外科手術データベース(JCVSD)の2013年から2018年のデータを用いて、急性大動脈解離手術を二次医療圏によって過疎型、地方都市型、大都市型の3群に分け、症例数、手術施設までの到達時間を抽出する。

●二次医療圏の人口別分類



(倫理面への配慮)

全国からの手術情報は個人が特定されない状態（「匿名」状態）で収集されておりデータ解析者を含めて匿名情報のみを扱っており、個人情報に関わる倫理面に配慮がなされている。

C. 研究結果

2013年から2018年の6年間での本邦での急性大動脈解離の手術件数は合計で29498件(全国で541施設)であった。施設数と症例数は過疎型から大都市型になるにつれて増加し、到達時間(中央値)は短くなっていった。

	施設数	症例数	到達時間中央値
全国	541	29498	19.3分
過疎型	28	1136	25.4分
地方都市型	246	12721	22.8分
大都市型	264	15636	17.1分

D. 考察

心臓大血管救急の代表疾患である急性大動脈解離手術は発症から手術までの時間が勝負である。過疎型医療圏の施設は少数ではあり到達時間が長い傾向にある。この違いが成績に影響を与えているか、今後成績や施設の状況などを中心により詳細な検討が必要である。この較差を解消する手法として、ICTを用いた医療情報連携の普及と広域救命救急医療体制確立は急務であると考えられる。

E. 結論

本邦の急性大動脈解離手術実施状況は二次医療圏の人口状況により違いが見られた。

F. 研究発表

1. 論文発表
 - (1)Saito A, Kumamaru H, Motomura N, Miyata H and Takamoto S. Status of cardiovascular surgery in Japan between 2017 and 2018: A report based on the Cardiovascular Surgery Database. 2. Isolated coronary artery bypass surgery. Asian Cardiovascular Thorac Ann. 2021;29:294-299.
 2. 学会発表 省略

G. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

特許取得、実用新案登録、その他 なし。